

アクロポリス美術館のアルカイック彫刻

伊藤 慶之助

アテネ、アクロポリスの丘は、東と東寄りの南北は、すぐ丘の近くまで街がせまっているが、南西から北西にかけては、低地をはさんで、フィロパッポス、プニックス、アレオパゴスの三つの丘が、糸杉などの樹林におおわれて昔の面影を保っている。

ペリクレス時代には、プニックスの丘にプニックス民会議所があつて、これから北へアゴラにかけて、民衆裁判所の法廷、南の列柱廊（ストア）、南東噴水亭、ヘルメスの列柱廊、南西噴水亭、ゼウスの立像のある列柱廊、造幣所、高官の住宅などが建ちならんで、ペリクレス時代の、アテネの重要な中心街だったらしい。

今、アレオパゴスの丘から北を見ると、アゴラいったいにかけて、これらの発掘した建築の遺跡にかこまれて、低い丘にテセイオン神殿のしように姿が見おろせる。

昭和四二年七月二日は、満月だったので、私は夕暮からアクロポリスに上つて、パルテノン神殿の東の石段に腰をおろし、低く見えるアクロポリス美術館の屋根の上にのぼる満月を觀賞しようと考えていた。

満月の夜は、アクロポリスの門を市民に開放することになっているので、その夜は月見の人出で大変なことになると、ホテルのボーイから聞いて、急に考えを変え、フィロパッポスの丘に上がった。

糸杉や雑木の間から、低地を越えて、パルテノン神殿が夕陽を受けて、同じ高さで視野に入る。

エレクテイオン神殿から、プロピュライア（前門）の長い石段に目を移すと、月見の人達であろう、蟻のように小さな人影が、夕陽を受けて無数に動いている。

こちらのフィロパッポスの丘は、ほとんど人影がない。陽が沈むあいだ、糸杉の樹林の小道を歩いて、アレオパゴスの丘に出てみた。アゴラ

アクロポリス美術館のアルカイック彫刻

アクロポリス美術館のアルカイック彫刻

に新しく建った、ビブリオテック、アドリアンや隣りの古いビザンチン寺院などをぼんやりながめているうちに、辺りは薄暗くなってきた。

フィロパッポスの丘に戻ると、パルテノン神殿から少し南に逸れて、晴れ渡った夕暮の空に、大きい満月が顔を出していた。

ニケ神殿の石段辺りに、人影らしいものが動くようにも見えるが、蟻のような月見の人出は夜の幕にとざされて、煌々と照り映えた満月の光りが、パルテノン神殿の南面列柱にあたり、吸い込まれるような白さに浮いて見える。

パルテノン神殿は、西方フリーズの一部と破風に、わずかに古代の彫刻が残されているが、多数の優れた彫刻は、外国に流出して、ロンドンの国立美術館、巴里のルーブル美術館などを見ないと、ギリシャ古典時代、ヘレニズム時代の彫刻は、全貌を知ることはいかない。

今、ロンドンの国立美術館のギリシャの室で、パルテノン神殿、東方破風に飾られていた「女神」の前に立つと、溜息がでる。溪流の水の流れるような薄ぎぬの美しいリズム、その薄ぎぬに包まれたみづみづしい芳醇な女人の肌の美しさ。

パルテノン神殿の、崩れ落ちた東方破風の下に立って、古代、その「女神」の飾られていた位置に、あのみづみづしい彫刻を置いてみると、まるで夢のような奇跡に思えてならない。

オリンピアの「ゼウス神殿」の東西破風の無数の彫刻は、遺跡からオリンピア美術館の大きい室に移され、古代破風に飾られていた原型のままだに、三角形に構成され、東と西の壁に向合って陳列されているが、パルテノン神殿の破風彫刻が、オリンピアのように全貌をまとめて見ることができれば、どんなすばらしいことになるだろう。しかし世界の各地の美術館、個人のコレクションに散逸してしまった今日では、とうてい不可能である。

パルテノン神殿東方フリーズの「アテナイの頭官連」同じく東方フリーズの「神々の集団」は、ロンドン国立美術館に陳列されているが、この「神々の集団」の一部、アルテミス、アポロン、ポセイドンを現した浮彫は、はなされてアクロポリス美術館にならんでいる。

それから、東方フリーズの「祭器を運ぶ少女たち」の五人の少女が祭器を持って並んで歩く浮彫は、ロンドン国立美術館にあるが、同じ「祭器を運ぶ少女たち」の五人の少女が向き合っている浮彫は、ルーブル美術館に陳列されている。

又、パルテノン南面フリーズの「ラピタイ人とケンタウロスの争闘」の連作は、ロンドン国立美術館に陳列されているが、その連作の一つは、ラピタイ人もケンタウロスも頭部が無くなっている。

このラピタイ人の頭部はルーブル美術館に、ケンタウロスの頭部はアテネ、アクロポリス美術館にそれぞれ所蔵されている。

こんな王合で、パルテノンの破風彫刻、フリーズなども各国それぞれに別れて陳列されている場合もあって、東方破風だけを考えてみても、とうてい不可能である。

紀元前四八〇年、ペルシャ軍アテネ侵入で、徹底的に破壊されたアクロポリスの神域は、戦後の復興のさい、破損した彫刻などを地ならしの為に、地下に埋めてしまった。

近世になって、学者の本格的な研究と発掘が始められるまで、これら貴重な彫刻は、約二〇〇〇年の星霜を、このアクロポリスの遺跡の土中に、全く忘れ去られていたのである。

アクロポリス美術館は、パルテノン神殿の東南に、丘を一段低くけづり取って、遺跡の風刻を壊さないよう考慮して建てられた、小さな美術館である。

一八七八年に建設以来、アクロポリスの丘から出土した彫刻を、陳列する小さな建物だったのが、発掘品がふえるに従って東に細長く増築されていった。

陳列品は、アクロポリスの丘から発掘されたパルテノン、エレクトイオンなどのギリシャ古典時代の彫刻が多いが「アクロポリスのコレ」と愛称される、アルカイック中期のイオニア風の華麗な十数個の少女像が、この美術館では異彩を放っている。

これより先きに、ギリシャに大型彫刻が現れ始めたのは、紀元前七世紀の中頃で、アテネ国立博物館にある「ニカンドラ奉納のアルテミス像」を見ると、生きている女というより、冥府の国の幽魂の世の人間、という感じである。

直立、正面視、両手は下に垂れ、エジプト風の髪飾りのかつらをつけているが、エジプト彫刻の具象性とは違う、抽象の世界である。

アテネ国立博物館には、もう一つこれと同じ、クソアノン形式の「アポロン、プティオス神殿跡から発掘された婦人像」があるが、これは頭部も腕もない棒杭のようなトルソーなので、女人の情緒は認識できない。

アクロポリス美術館のアルカイック彫刻

アクロポリス美術館のアルカイック彫刻

先年のギリシャ旅行で、私はデルフイ美術館の「クレオビスとビトン」を見ておどろいた。「ニカンドラ奉納のアルテミス像」と同じアルカイック初期の彫刻で、直立、正面視、両手を下に垂れ、エジプト風のかつらを同じように着けているが、左足を一步前に踏み出し、胸腹と腕腰にかけて、不釣合に見える程、筋肉が誇張されている。

エジプト彫刻の深い影響である事は、一見して解るが、ある意味ではエジプト彫刻よりも生命力が旺盛である。

この不釣合に見える筋肉の誇張からくる、生命力とムーブマンは、日本の「仁王」の造型に近似したものがある。作者はポリュメデスとなっているが、クレタ系統の、所謂ダイダロス様式である。

ギリシャ、アルカイック初期の大型彫刻に「生氣」をふき入れたと伝えられる、クレタ島の伝説の彫刻家、ダイダロスの「生氣」というのは「仁王」の造型に近似した、この動きと迫力なのであろうか。

ダイダロスやデイポイノスの活躍したクレタ島は、今歩いてみると、なんの変哲もない地中海の一孤島だが、当時は地中海を渡ってすぐエジプトに続き、エジプト王朝に栄えた大型丸彫り彫刻の影響を身近に受けて、仕事の出来る環境にめぐまれていたのである。

ギリシャ、アルカイックの彫刻は、クソアノン形式から、ダイダロス様式を辺て、エジプトの影響の固さから徐々に脱却し、中期になって、イオニア主義の華麗な技法から、自然に即した描写法と優雅さを得て、ギリシャ独自の美しさに発展する。

紀元前五六〇年頃のアテネは、僭主ペイシストラトスのイオニア主義の積極的な政策と宣伝によって、アルカイック中期の彫刻に、イオニア風の華麗と、自然主義的な描写が加えられた。

この頃、墓像として、アポロン像としてのクローロス（青年像）と女神への奉納彫刻としてのコレー（少女像）が盛んに製作された。

アクロポリスの遺跡から発掘され、アクロポリス美術館に陳列されている十数個の美しいコレーも、紀元前五三〇年から前四八〇年頃に、アクロポリスの神殿の女神アテナなどに、感謝と愛をこめて奉納されたものである。

アクロポリス美術館の北側第二室に、アルカイック期の優れた彫刻「仔牛を担う男」「三頭の怪物」がならんでいる。

「仔牛を担う男」MUS NO. 624 (第一図)



第1図 仔牛を担う男

前五〇〇年 高さ一・五二m 大理石

男の胸の中心で、人物の腕と仔牛の足を強引に交差させた、思い切った構成になっているが、担った仔牛の背中の線が、向って右に低く下り、男の顔の左に、仔牛の頭を高く食出させ、重量を左上に強く引きつけたのでバランスが動き、二個の頭から右下へ強い斜線になって、返って特殊な面白さになった。

男の大きい目と、微笑と、かつらの垂れた線とが照合して強靱な印象をあたえる。

「三頭の怪物」MUS NO.35 (第一六図)

前五七〇年 石灰石着色

旧アテナ神殿の破風彫刻だが、髪と髯に着色の青色があ

ざやかに、印象的に残っているので「三頭の怪物」というより、愛称「青髯」で知られている。

とび出た眼玉と、頬から顎にかけて、たくましい青髯が目につき、鼻下にピンとはね上った気取った髯が、怪物というより、道化役者じみた愛嬌があって面白い。

アテネ国立博物館には、アルカイック中期のクローロス（青年像）の優れたものは、多数陳列されているが、コレー（少女像）の美しいものは非常に少ない。数個のコレーの頭部や、エレウシス発掘の「少女小像」などもあるが、何となく表情が固くて沈んでいて、はっきりアルカイック、スマイルの出ているものがない。

アクロポリス美術館には、クローロスがほとんど所蔵されていないが、コレーの優れたものが、多数陳列されていて、どれも花の蕾のような可憐な美しさがあり、アルカイック、スマイルのすばらしく魅力的なコレーが多数ならんでいる。

アクロポリス美術館のアルカイック彫刻

アクロポリス美術館のアルカイック彫刻

中国大同府の大同石仏寺の第一二窟二体仏のアルカイック、スマイルも魅力的な微笑で、私はこれを見て深く感激したが、大同仏の「微笑」は謎を含んだ慈愛のある静寂なものである。

北京山中商会の井上支店長の斡旋で「古拙の微笑」の美しく出た六朝仏の頭部を手に入れ、今でも邪念のおこった時は、その前で端座して、静かに邪念を払う。

アクロポリスのコレーの「微笑」は六朝仏の微笑と異なり、少女の発刺ささ知性がそれによって強められる。概して明るい表情である。

アクロポリス美術館の左側奥の第四室の広い室には、豊麗花の匂うような美しいコレーが、肩を接して十数個ならんでいる。これは、世界のどの美術館も持たない、すばらしい宝庫である。

入口の壁面には、飾環を髪につけた大理石のコレーのマスクが置かれている。眼と髪だけに、臍脂の色彩が残っているが、顔は大理石の気味の悪い程澄んだ白色で、血の気の失せた唇に、優婉な微笑を湛えている。

ギリシャ悲劇の面か、日本の能面を思わせる幽玄な冷たさである。

室内に眼を移すと、色々な型のキトンを着た少女が肩を並らべている。二年前に訪れた時と、少しも変らぬ微笑を浮べた表情である。

「イオニア風衣装のコレー」MUS. NO. 673 (第二図)

前五二〇年 ペンテリコン大理石

イオニア風キトンを着たコレーの頭部である。上衣を右



第2図 イオニア風衣装のコレー

肩から洒落れて吊ったものが多いが、この少女は上衣を両肩に掛けて、襟先きに飾りをつけている。

下顎が張って目がつり上り、癖のある微笑を湛えた口もとは、この少女の意地っ張りで、意志の強さがよく現れている。微笑をはっきり口もとに湛え、目尻りのつり上った容貌は、アルカイックの特徴である。

「ドリア風衣装のコレー」MUS NO. 679 (第三図)

前五三〇年 高さ一・二一m バロス大理石

一八八六年にエレクトイオン神殿の西側から発掘された。

他のコレーはイオニア風の華美な衣装を着たものが多いが、この少女は、ドリア風の飾りも模様もない単色のペプロスを着て、装身具もつけていない。

上衣の右脇で、わづかに襷をつけ、布を重ねて飾りにし、ペプロスの腰から下へ間隔を置いて、共色のプリーツが裾に下りている。

上衣の右の下端の窪みに、僅かではあるがはっきりと、唐草模様が残っているのと、プリーツの膝の辺りに添って、唐草模様と同色の茶色の斑点が見えるが、ペプロスの要所に唐草の帯模様が描かれていたようである。

髪の毛飾も、前から見えない程小さなもので櫛上げられた髪の下から、端麗な可憐な顔と、大きい耳が出ている。

髪と眼に臙脂の色彩が、唇に口紅のピンクが鮮かに残っているの、アルカイックの微笑が、若い少女の清純な美しさを、一曾活々させている。供物を持つ手と、額の髪の一部と足先きが欠けているが、他はきれいに残っている。

「コレー立像」MUS NO. 674 (第四・五図)

アクロポリス美術館のアルカイック彫刻



第3図 ドリア風衣装のコレー



第4, 5図 コレー立像

前五〇〇年 高さ〇・九一m パリアン大理石
一八八六年にパルテノン神殿の南西から発掘された。イオニア風のキトンを着て右肩から上衣を吊り、頭に飾環をつけているが、全体にコバルト、みどりなどの色彩が美しく残っている。

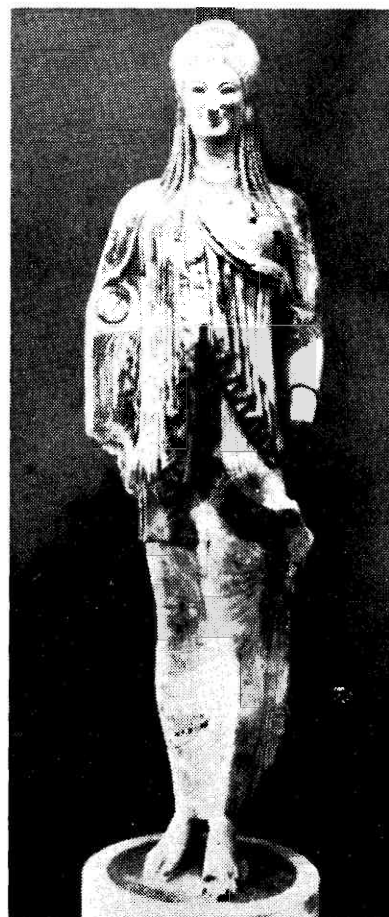
他のコレーは、眼を臙脂に彩色されているが、この少女はアイシャドーをつけたように、黒色に塗られているのは珍しい。大きな目の、深かい黒が、艶っぽくうるんでみえるので、口紅の薄いピンクと、おだやかな微笑とで、清楚な人柄を感じさせる。

後ろ姿も、肩から胸の厚さが少ないので、胴が細くみえ、吊っている薄ぎぬは背後が丈が短かいので、細腰が大きく現れる。

髪飾環の後ろの垂れは、長方形に薄ぎぬの背中に重なって垂れる。

「イオニア姿の少女」MUS. NO. 682 (第六・七・八図)

前五二五年 高さ一・八二m 大理石
イオニア風文化の粹と見られる姿の少女像であ



第6図 イオニア姿の少女

る。当時の華やかなアテネの社交界に君臨した、誇り高い女性の、自信に満ちた拳止が、顔から、キトンの着こなしにもよく現れている。

薄ぎぬに包まれたしなやかで美しい足、左腕を少し後ろに引いて、胸を張り、キトンの端をつまんで左足を前にふみ出した姿は、清楚端麗で、当時のアテネの流行をリードした高踏的な容姿であろう。

眼も自分の知性を認識したやさしさが見え、アルカイックの微笑の口辺が、皮肉なふくみを湛えて、美しく耀いてみえる。髪は美しい巻毛にして派手なディアデイマをかむっている。

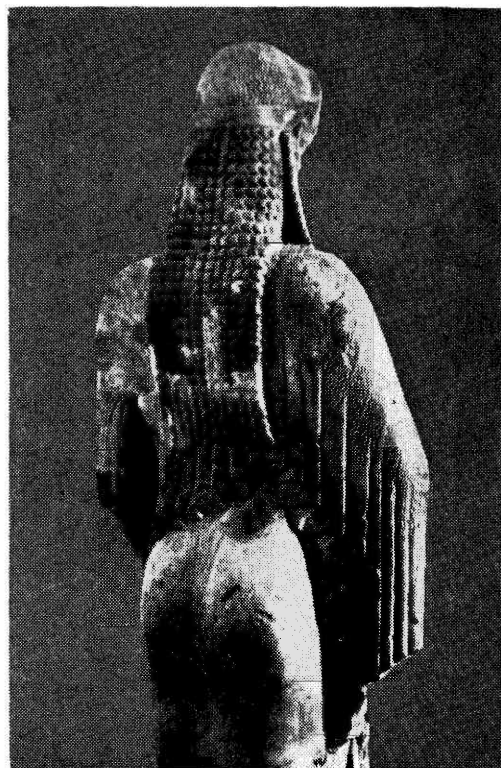
横顔も鼻筋が高くとおど、大きい耳飾りをつけて、細く撚った髪を胸に垂らせている。

後ろ姿も、腕を張った肩巾から、急に細腰になっているので、洗練された粋き好みの容姿が躍如としている。日本の茶羽織の好みと通じるものが

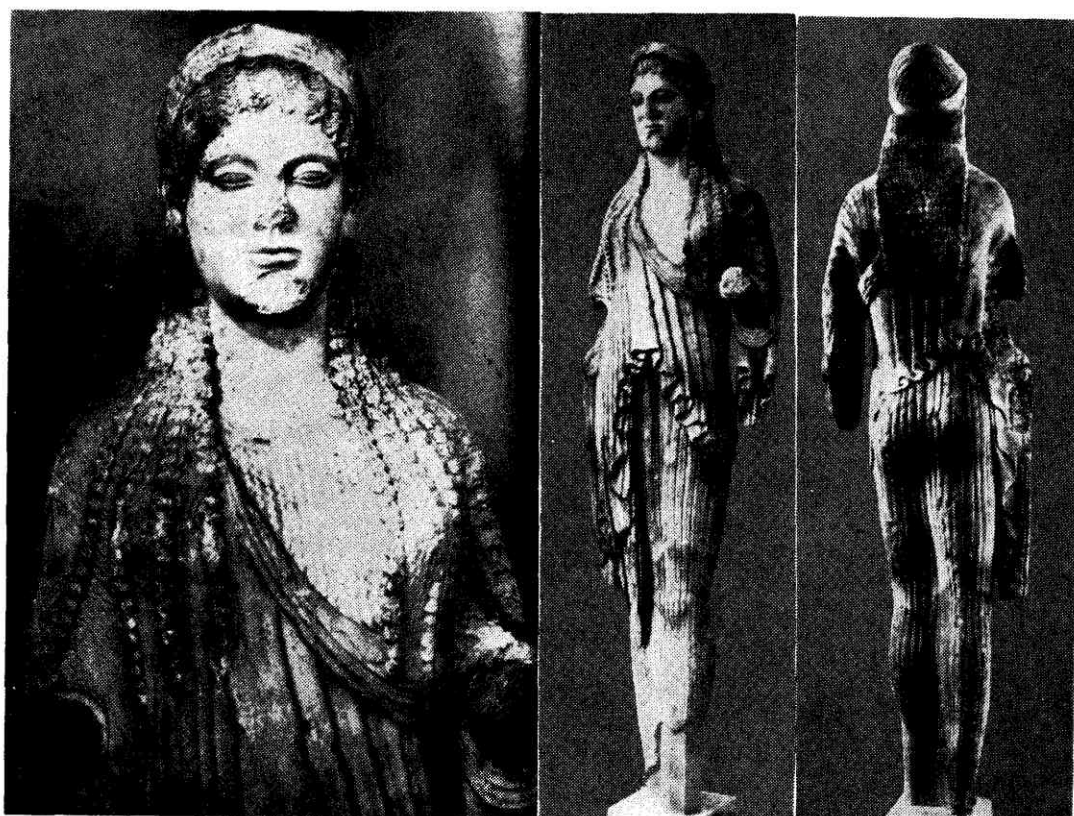
アクロポリス美術館のアルカイック彫刻



第8図 同 頭部



第7図 同 背後



第10図 同正面半身

第9図 供物を両手で持つコレー

ある。

飾環の後ろの垂れも、巾が細く長くて腰まで垂らせている。9図の後ろ姿とくらべると、同じ型のイオニア式の衣装でありながら、趣味の違いと、キトンの着付けの相違で、こんなに粋なスタイルになる。イオニアン、スタイルの代表的な美しいコレーである。

一八八六年に、エレクトイオン神殿の北西から発掘された。

「供物を両手で持つコレー」MUS NO. 685 (第九・一〇図)

前五〇〇年—前四九〇年 高さ一・二二m

イオニア風のキトンに襜の荒い薄ぎぬを右肩から吊っている。髪の毛の飾環もつけているが、このコレーは神への捧げ物を両手に持っているの非常に珍しい型である。

片手で捧げ物を持ち、片手を下げて衣服の端を摘んだ姿が、コレーの定型になっているが、両手で供物を持つ為に、両側とも衣服が裾まで下りている。

肩巾と腰が特に小さく、下着の襜がみな直線で裾まで下りているので後ろ姿もズボンかタイツを穿いているように見える。

顔の表情も固く、微笑をふくまない容貌は、アテネ国立博物館のコレーの型に似ている。捧げ物を両手に指つ型は、非常に珍らしく、左手は腕先が少し残っているが、右手は腕の関節から欠けて、丸い穴になっている。

一八八八年にパルチノン神殿の南西から出土した。

「コレー立像」MUS NO. 671 (第二一図)

前五二〇年 高さ一・六四m ペンテリコン大理石

一八八六年にエレクトイオン神殿の西から発掘されたこのコレーは、頭につけている飾環も大きく盛り上った型で、その下に房々とした髪が波うっている。目が吊り上り、癖のある微笑を浮べ、顎の長い個性的な顔である。

この少女は、一四図と同じニットのような編物のキトンを着ているが、その上にガウンのようなクロークを羽織っている。

クロークの衿の線が、二筋の直線になって衿から裾にまっすぐに下りている型は、珍らしい。イオニア風の、美しい曲線をえがいた華美な衣装と比べると、当時のアテネの質実な家庭の少女が偲ばれる。

編物のキトンの模様も、ジグザクで直線に並んで下におり、下着の裾の襷も直線で、全て垂直線の並列で、僅かにクロークの盛りあがった肩に、上昇する細い数本の美しい曲線と、胸に垂れた髪の強い斜線が、構図の極め手となっている。

「イオニア風の少女」MUS NO. 675 (第二二・二三図)

前五一〇年 高さ五五、五cm キオス大理石

イオニア風の華美なキトンをつけたこのコレーは、一八八六年に頭部を発掘され、一八八八年にトルソーが出土して継ぎ合せたもので、場所はどこにもパルテノン神殿の南から発掘された。

イオニア式特有の華美な服装で、全身にわたって古代の色彩が美しく残っている。

アクロポリス美術館のアルカイック彫刻



第11図 コレー立像

アクロポリス美術館のアルカイック彫刻

緑色のキトンの右肩から、白の薄ぎぬを吊っているが、襷のデリケートな曲線が、美しいリズムをえがいて、胸と腰を包み、白地に緑と臙脂で大柄模様が描かれているが、模様の色彩も美しい。

頭の飾環の下から、櫛上げられた髪が波うち、エメラルドの耳飾りをつけている。

大きな印象的な眼と、美しいアルカイックの微笑が、渾然と溶け合って優婉なムードが出ている。イオニア風の美しい典型的な風貌である。

「ローリー立像」MUS NO. 670 (第一四・一五図)

前五二〇年 高さ一・三七m 大理石

ニットのような袖のある編物のキトンを着て、裾長に薄ぎぬをまとい左手を前に回して薄ぎぬの端を持ちあげている。イオニア風の優美な衣装をつけたローリーのなかにあって、一風変った容姿の少女である。

キトンのデザインも、袖の形もゴルフ場でよく見かけるスポーティな風采で、イオニア文化の少女としては異色である。

横顔の髪の飾環の下から、丸い耳飾りをつけた大きい耳が見え、微笑の口許と、何かを見詰める瞳が活々させている。

頭の飾環にも、丸い耳飾りにも小さな花模様が描かれている。一八八六年にエレクトイオン神殿の北西の地下で発見された。一一図のローリーは、同じ編物のキトンの上に、クロークを羽織っている。

「アンテノールのローリー」MUS NO. 681



第13図 同 顔



第12図 イオニア風の少女

銘文により、作者はアンテノール、奉納者はネアルコスとされている。高さ一・八八mの大理石で、イオニア風の華美なキトンに、右肩から薄ぎぬの襷の美しい上衣を吊り、左腕を少し引いて裾を持ちあげている姿は、六図の「イオニア姿の少女」の型に似ている。

供物を持つ右手は欠けているが、肩巾の広い上半身から、足の先きに細く絞られてゆく容姿は、イオニア風の優雅な姿がよく現れている。

鼻から口にかけて、欠損があるので、微笑の様相が解らず顔の魅力が見られないのは、残念である。

「果実を持つコレー」MUS NO. 890

前五三〇年 高さ一・〇三m 大理石

一八八六年にエレクトイオン神殿の北西から発掘された。

この像は、珍らしく供物を捧げる右手が補修されて残っているので、貴重なものである。供物の果実は、美術館ではアップルとなっているが、ざくろではないだろうか。

キトンから薄ぎぬの襷にかけて、極彩色の跡が随所に残っていて、相違きつい色彩が施こされていたことが解る。

髪飾は小さなものを後頭部につけているので、前からは余り見えない。飾環の背後の垂れは、長方形で下端が水平に織り止めになっているものが多いが、このコレーの垂れだけは、細い先の尖ったものが並列されている珍しい型である。

アクロポリス美術館のアルカイック彫刻



第15図 同 横 顔



第14図 コレー 立 像

後姿の薄ぎぬの襷のすぐ下の腰に、土中での雑物の大きいくつつきがあって、美観を毀している。

「コレー立像」MUS NO. 684

前四九〇年 高さ一・二二m 大理石

一八八二―八三年に、パルテノンの東から出土した。

このコレーは、胸部が厚く、キトンも薄ぎぬの襷も慎重に深く彫り込まれていて、重厚で優雅な印象をうける。

顔の表情も立派で、日本の仏像に見る莊嚴ささえ窺える。頭の飾環も花飾りのふちのないお碗のような形で、前から見ると、立派な顔の頭上に仏像の光背そっくりに、細く丸く見える。

イオニア風の優艶な美しさでもなく、可憐清楚でもなく、アクロポリスのコレーとしては、珍しい重厚な優雅さである。

クローロス（青年像）は、アクロポリスから余り発掘されていない。クローロスの優れたものは墓像に多いので、各地で出土した優れたクローロスは、アテネ国立博物館に集められ、多数陳列されている。

アッティカのヴォロマンドラの墓地で発見された「ヴォロマンドラの青年墓像」は、紀元前五六〇年頃の作で、アテネ国立博物館のクローロスの中でも、アルカイック中期の典型的な美しい彫刻である。

同じ美術館の、アポロン、プティオス神殿跡から出土した「アポロン像」と較らべると、定型は継承しながらも、アルカイック中期のイオニア文化の自然描写と優雅な思想によって、格段の進歩のあとが見られる。

アクロポリス美術館の「青年立像」MUS NO. 688は、前四八五年の大理石像だが「ヴォロマンドラの青年墓像」よりは、時期のくだるもので、顔の表情、頭髮の手法などに、又大分変化が見られ、胸から腰にかけての技法も観念的なものから、自然描写による写実味が加えられている。エジプト風の固さから開放されて、のびのびと自由になってきている。

一九三六年に、アッティカのアナヴュッソスの墓地で発見された、アテネ国立博物館の「アリストデイコス青年墓像」は前五〇〇年の作だが、アクロポリス美術館の「青年立像」より又一層技術の進んだものである。

直立、正面視、両手を垂れたアルカイックの定型は維持しながら、胸から腰えの肉付けの手法も、顔、頭髮の写実の技術も、一層の冴えを見せている。

アルカイックのこの頃の、コレー（少女像）にしてもクローロス（青年像）にしても、アルカイックの定型は継承しながら、刻々微妙な変化を見せてつつ、徐々に古典時代への、弛まぬ努力がなされていることは見逃せない。



第16図 三頭の怪物頭部